KYOKYO 137

特　集　新学長からご挨拶

特　集　京都教育大学グローバル人材育成プログラム開発プロジェクトの全貌
－めざせ！グローカル教員－

京都教育大学

＜表紙＞

（左）**附属京都小中学校９年生　中川　千帆里**

私がこのインコの写真（資料）を見たとき、「こんな色鮮やかな鳥が本当に存在しているんだ！」と驚きました。このインコの色の美しさを絵で表現したいと思い、描いた作品です。

（中）**附属京都小中学校９年生　塩尻　璃杏**

この作品は、枝にちょこんと座った可愛いリスを描いたものです。リスは茶色のイメージですが、描いているうちに自分の中の色のイメージを壊してみたいと思い、十二色相環を意識し相性の良い色を塗り足しました。

（右）**附属京都小中学校９年生　中薗　　創**

この作品は野鳥を模写したものです。僕がこの作品で工夫したところは、色の明暗をつけて、より鮮やかな絵になるようにしたことです。鮮やかな色彩にすることで、鳥が自然の中で生息している生命感を表現しました。

＜裏表紙＞

附属京都小中学校７年生　吉田　智之愼

この絵は、江戸時代の浮世絵「見返り美人の図」を模写したものです。キレイに写せたので良かったのですが、着物の模様を描くのに、すごく時間がかかって，大変でした。

National Institution for Academic Degrees and University Evaluation
NIAD-UE
UNIVERSITY ACCREDITED
Mar.2013

CONTENTS

広報第137号

＜表紙左＞　附属京都小中学校９年生　中川 千帆里
＜表紙中＞　附属京都小中学校９年生　塩尻 璃杏
＜表紙右＞　附属京都小中学校９年生　中薗　創
＜裏表紙＞　附属京都小中学校７年生　吉田 智之愼

特集

2　**新学長からご挨拶**
京都教育大学学長
細川　友秀

4　**京都教育大学 グローバル人材育成プログラム 開発プロジェクトの全貌 ーめざせ！グローカル教員ー**
グローバル人材育成プログラム
開発プロジェクト委員会座長
体育学科教授
中　比呂志

海外見聞録

7　**フィンランド、エストニアを訪問し 住まい・まちづくり学習を考える**
家政科准教授
延原　理恵

留学生の声

9　**京都が一番**
日本語・日本文化研修生
オムカル　カイラス　チルマレ
（インド出身）

研究余滴

10　**戦後70年目からの平和と教育**
教育学科教授
村上　登司文

京教今昔物語

12　**教室外の活動で学んだこと**
理学科教授
芝原　寛泰

京教学内探訪

14　**竹と共に暮らしを築く**
附属特別支援学校副校長
髙岸　正司

附属学校園だより

16　**附属桃山小学校から全国へ**
附属桃山小学校副校長
兒玉　裕司

17　**持続可能な社会の担い手を育むために ～グローバル社会で活きる自立と 共生の力を育む学校をめざして～**
附属桃山中学校副校長
佐々木　稔

18　**創立130周年を迎えて**
附属幼稚園副園長
斎藤　真由美

新任の先生から

19　**植物の栽培を通して**
環境教育実践センター教授
南山　泰宏

20　**「学びの原点」を追究する**
教育支援センター教授
岡田　敏之

卒業生の声

21　**心の声に気付く**
草津市立笠縫小学校　教諭
村上　ちひろ

子どもの成長を、見逃さない教師でありたい
京都市立下京渉成小学校　教諭
山口　祐

学生広報委員会

22　**あなたはどのSNSを使っていますか？ ～SNS開設　特集～**

ようこそ大先輩

24　**番匠宇司先生のこと**
京都教育大学附属桃山中学校元副校長
京都聖母女学院短期大学教授
多羅間　拓也

読者の皆さまへ・編集後記

25　地域連携・広報委員会委員長
細川　友秀

新学長からご挨拶

京都教育大学学長　細　川　友　秀

平成28年4月から京都教育大学の学長を務めることになりました。どうぞよろしくお願い致します。国立大学法人京都教育大学が設立されてから12年が経過したこの時点で学長の重責を担うことに改めて身が引き締まる思いです。

第3期中期目標期間の初年度にあたって

平成28年4月から第3期中期目標期間が始まります。国立大学は、法人化以降、6年間を中期目標期間として、教育、研究、社会との連携や社会貢献、組織の運営・管理等に関して、6年間を通した目標と計画を定めて目標を達成するため計画を実施してきています。平成28年4月は、法人化後、第1期と第2期の中期目標期間2期分を経過し、第3期の開始年度に当たります。第3期中期目標期間では、国立大学に対して自律的に改革を推進することがこれまで以上に厳しく求められ、国立大学の法人化の真価が問われると考えています。

学長として目指す大学像

第3期中期目標期間の京都教育大学は、歴史と伝統文化と大学のまち京都にあって、教職員一人ひとりが教育に関わる仕事に従事することに自信と誇りをもち、一致協力して優れた教員を養成するという目的に向かいます。そして、深い学問的知識と優れた教育実践力とを兼ね備えた学校教育教員を養成するとともに、自然や社会の真理の解明、文化を対象とする基礎研究とその成果を教育に活かすための研究を推進することによって、教育と研究に力を注ぐ個性輝く教育大学を目指します。

優れた教員を養成するため、入学から卒業までの学部教育全体の改革に取り組み、教科と教職に関する知識と技能、それらを基盤として教育実践の様々な課題に対処するための思考力・判断力・表現力等の能力を学生に育成し、教育の現場において主体的に仲間と協働して課題を解決しようとする態度を養います。このような教育と学生一人ひとりへのきめ細かい指導を通して、子どもの成長する過程に関わることに大きな喜びを感じ、人間の成長と社会の発展における教育の役割を理解して学び続ける教員を養成し、教職を志す有為の学生が集まる教育大学を目指します。

また、京都における義務教育に関わる教員養成の中心的役割を果たしつつ、教育現場における今日的課題に関する研究や現職教員を支援する先進的研修等の研究開発に取り組んで、地域の教員養成・研修の高度化において中心的役割を担い、京都に根差して京都に必要とされる教育大学を目指します。

教育に関わる仕事に誇りと喜びをもって

私達人間は、意志、感覚、感情、経験、概念、知識などさまざまな事柄について、言葉を使って思考し、相手に伝え、議論することができます。また、それらの事柄を、文字を駆使して文章化し、人から人へ世代から世代へと伝えることができます。このように、人類が蓄積してきた様々な経験、知識、技能、科学、芸術、思想、宗教、文化などを世代や時代を越えて伝え、社会を発展させることができるのは、人間のみが創出した系統的・組織的な教育の仕組に依存します。現在の人類の生存と繁栄は、言葉と文字を駆使する人間特有の技能に依存する教育の仕組がなくてはあり得なかったことでしょう。私は、教育の仕組が未来も人類社会を持続させ、進歩させるための最も基本的で重要な礎であると考えます。

私達は誕生してから、家庭教育、学校教育、社会教育などによって、社会から様々な精神的影響を受けて人格を形成していきます。なかでも学校教育は、社会を形成する人々を育成することを目的として系統的・組織的に行われ、一人ひとりの人格形成において非常に重要な役割を果たしています。

このような学校教育に携わる教員の養成をミッションとする京都教育大学は、学生も教職員も共に学校教育に従事して社会に貢献することに誇りをもち、さらに、幼児・児童・生徒一人ひとりが人間的に成長していく過程に関わることを喜びとする大学でありたいと願っています。

自然な樹形を生かした手入れによって
メインキャンパス中央で育つヒマラヤスギ

急速にグローバル化する社会に生きる教育を

20世紀後半から21世紀にかけて交通手段や通信手段が急速に発達して経済のグローバル化が進み、多くの日本人が海外にでかけるとともに、日本への外国人観光客、留学生や日本で就労する外国人も増えています。また、パソコンの普及とインターネットの急速な拡大によって、日本をはじめ世界の多くの国々で個人が直接世界の国々や人々に日常的にアクセスするようになっています。

このように急速にグローバル化が進む21世紀の社会では、だれもが民族や文化・風俗習慣の異なる外国の人々と交流する機会が増えることでしょう。また、様々な経済活動において国際的に活躍する人々がますます求められることは言うまでもないでしょう。

そのため、国際的に活躍するグローバル人材養成の教育はもちろんですが、急速にグローバル化する日本の社会で、だれもが民族や文化・風俗習慣の異なる人々を理解し、良好な関係を保って生きることができる教育が必要であると考えられます。このような日本の社会において学校教育に携わる教員は、まず、英語運用力や英語指導力を備える必要があります。そのうえで、日本の国や地域及び世界の国々や民族の歴史・文化・風習などについて幅広く知識を有し、国際理解教育や国際交流活動及びグローバル人材育成に積極的にかかわることのできる教育実践力が必要です。

京都教育大学は、歴史と伝統文化のまち京都の立地を活かし、附属学校と一体となって、グローバル化する社会に対応し、国際理解とコミュニケーション能力を備えたグローバル人材を育てる教員の養成を推進します。

自然と共生する教育を

世界の国々で急速に進むグローバル化と並行して、20世紀後半から21世紀にかけて世界の平均気温が、長期的には確実に上昇しています。その主な原因は、世界の各国における産業の振興など人間の経済活動が地球規模で拡大していることによって、大気中への二酸化炭素の排出量が急激に増え、植物の光合成や海洋による吸収量をはるかに超えて、二酸化炭素が大気中に着実に蓄積していることにあります。地球の平均気温の上昇は、海洋の水面上昇、世界的な異常気象、地球規模の生態系の変化を引き起こすと考えられます。これは、人間の経済活動の拡大が地球規模で自然環境を破壊的に変化させる典型的な例です。熱帯雨林の大規模伐採、インドや中国などで典型的に発生している極めて深刻な大気汚染、原子力発電などによって生ずる有害な放射性廃棄物の蓄積なども同様な例です。

私たちは、地球の自然が有限であること、人類が自然の生態系の中で進化してきたこと、そして、その中でこそ生存することができることをはっきりと認識する必要があります。私たち人間の経済活動が、多くの生物種を絶滅させることなく生物多様性を脅かさず、自然の生態系の中で許容されることが必要です。

21世紀は、私たち一人ひとりが周囲の自然や地球の自然環境を大切にして、自然と共生する教育が大切になります。本学のメインキャンパスは、自然を活かした植栽保全の努力を通して、京都駅に近く伏見区市街地にありながら、京都東山に隣接して緑が豊富で巨樹も生育し、多くの昆虫や野鳥、ときにはキツネやタヌキが姿を見せる豊かな自然環境を保っています。

京都教育大学は、このような環境を活かして、学生が身近な自然と向き合い主体的に自然と対話する活動などを通して、学生に自然を大切にする精神を養い、理系教科に強く新しい学習をデザインできる教員の養成も推進します。

本学の自然豊かなキャンパスに生育する楠の大樹
（自由に自然のままの樹形で大きく成長）

京都教育大学グローバル人材育成プログラム開発プロジェクトの全貌 －めざせ！グローカル教員－

グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト委員会座長　体育学科教授　中　比呂志

平成27年は、私の好きな映画が3本も上映されました。幸せにも私は全て劇場で見ることができました。その映画は「ターミネーター：新起動／ジェニシス」「ジュラシック・ワールド」「スターウォーズ／フォースの覚醒」です。「映画って本当にいいですね！」と思いつつも、これらの映画から未来の社会を心配してしまうのは私だけでしょうか？未来を心配するキーワードは、デジタル化社会、ゲノム編集社会、グローバル化社会です。皆さんは、どう考えますか？このような社会がもうそこまで来ています。

世界がグローバル化に突き進む中、現在、本学では、教員養成大学としてグローバル化社会に対応できる人材の育成に取り組んでいます。それがここでご紹介する「グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト」です。

1．グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト

これまで、グローバル人材と言えば世界を股にかけて活躍するグローバルリーダーがイメージされることが多くありましたが、国内のグローバル化の現状を踏まえれば、全ての社会構成員に何らかの形でグローバル化に対応した意識や行動が求められるようになってきました。すなわち今後は、国際的に活躍するグローバルリーダーの育成に加え、全ての子どもたちにグローバル化に対応できる能力を身につけさせる必要があります。

教育現場ではグローバル人材を育成するために英語教育が推進されるとともに、スーパーグローバルハイスクール事業や国際バカロレア認定校の設置に向けた取り組みが進められています。また、日本国内の内なるグローバル化も進行しており、日本語を母語としない子どもへの対応も課題となっています。このように教育のグローバル化に対応できる教員の資質・能力の育成が急務となっており、本学においても教員養成のグローバル化対応が求められています。

このような状況の中、本学は「歴史と伝統文化のまち京都の立地を活かした国際理解とコミュニケーション能力を備えたグローバル人材を育てる教員の養成・高度化」をミッションに掲げ、平成26年度からこの「グローバル人材育成プログラム」の開発プロジェクトをスタートさせました。

プロジェクトの第一の目的は、教員養成大学である本学におけるグローバル人材を育成できる教員の養成です。英語運用能力等における一部の高い能力を備えた教員だけでなく、全ての学校教員が幅広い意味でのグローバル人材育成に携わる状況を想定し、そのための資質・能力を備えた教員を養成するためのプログラムを開発しています。具体的には「グローカル教員」という新たな概念を提案します。ここで提案するグローカル（Glocal）教員とは、地域の学校において地域の特性やリソースを活用しながら、地域（Local）の伝統文化や地域の特色を大切にして学校現場で教育に携わり、グローバル（Global）な視点を持ちながら教育のグローバル化に向き合い実践できる教員を意味します。そのための教員の資質としては単に海外経験が豊富であるとか、英語をはじめとする外国語の運用に堪能であるだけではなく、地域の実情を踏まえて教育実践を行う資質・能力が必要不可欠となると考えられます。

第二の目的は、本学と附属学校園の連携のもと、幼稚園から高等学校及び特別支援学校において活用できる系統的なグローバル人材育成カリキュラムを開発することです。具体的には、学習指導要領に基づくカリキュラムをグローバル人材育成の観点から見直し、通常のカリキュラムの中にグローバル人材育成を目的とする教育内容や活動を随所に盛り込むことを目指しています。このことによって、さまざまな国の出身者や多様な言語のネイティブスピーカーをリソースとして活用することが難しい条件下にある公立学校においても、グローバル人材育成に資する教育を展開することが可能となると考えられます。

本プロジェクトの全体像について述べてきましたが、以下ではさらに本プロジェクトの内容を具体的に説明していきます。

2．京都教育大学グローカル教員育成プログラム

ここでは、まずグローバル人材育成に関する地域の取り組みに目を向けてみます。本学が立地する京都府・市においても様々な取組みが進められています。京都府では、「京都府グローバル人材育成推進プラン」を策定し、重点施策として、①児童生徒の英語によるコミュニケーション能力の育成、②英語を指導する教員の英語力及び指導力の育成、③京都の伝統や文化を学び、発信する人材の育成、④国際的に活躍する人材

の育成を掲げています。

また、京都市では、「京都ならではの実践的英語力」育成プログラムを進めています。具体的には、英語教育推進研究拠点校事業や中高生の実用英語検定の検定料を一部助成することで英検受検を奨励する「英検」チャレンジ事業、世界で通用するコミュニケーション能力の向上を目指して、2016年3月に日吉ヶ丘高校内に英語村「ハロー・ビレッジ」を設置する計画などが挙げられます。地元の教育現場では、すでにグローバル人材育成の取組みが始まっています。

そこで、本学では、地域の教員養成機能の中心的な役割を担う大学として、教師教育の中でのグローバル人材育成に取り組むこととしました。本学が進めているグローカル教員育成プログラムは、①英語運用能力と英語指導力、②多様性を理解し、尊重する意識や態度としての多文化共生力や暮らしている地域や自国及び世界の国々の歴史や文化についての知識、③学校現場において多文化共生教育や国際理解教育など、グローバル人材育成に積極的に関わることのできるグローカル教育実践力の3つの資質・能力を育成し、教育のグローバル化に向き合うことができる教員の養成を目指すものです。

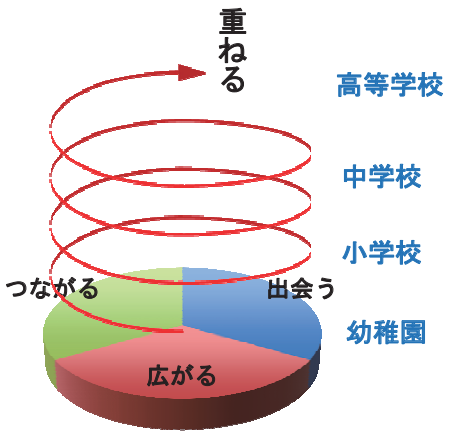
このグローカル教員育成プログラムでは、海外協力校（韓国・中国・タイ）での短期研修プログラム等に参加するとともに、指定された授業科目を履修します。本プログラムには、「グローカル教員コース」とより高度な英語運用能力と専門性の習得をめざす「グローカル教員アドバンスコース」を設けています。「グローカル教員コース」はグローカル教員育成カリキュラム内から24単位以上、「グローカル教員アドバンスコース」は28単位以上を履修します。また、所定の語学スコア又は英語資格を取得する必要があります。

本プログラムの運用は平成28年度からの予定です。新入生だけでなく、平成27年度以前入学生も対象とします。本プログラムの要件を満たした者は、申し出により「グローカル教員育成プログラム履修証明書」の交付を受けることができます。教員採用試験等に際して、本プログラムの修了者であることを積極的にアピールしてほしいと考えています。

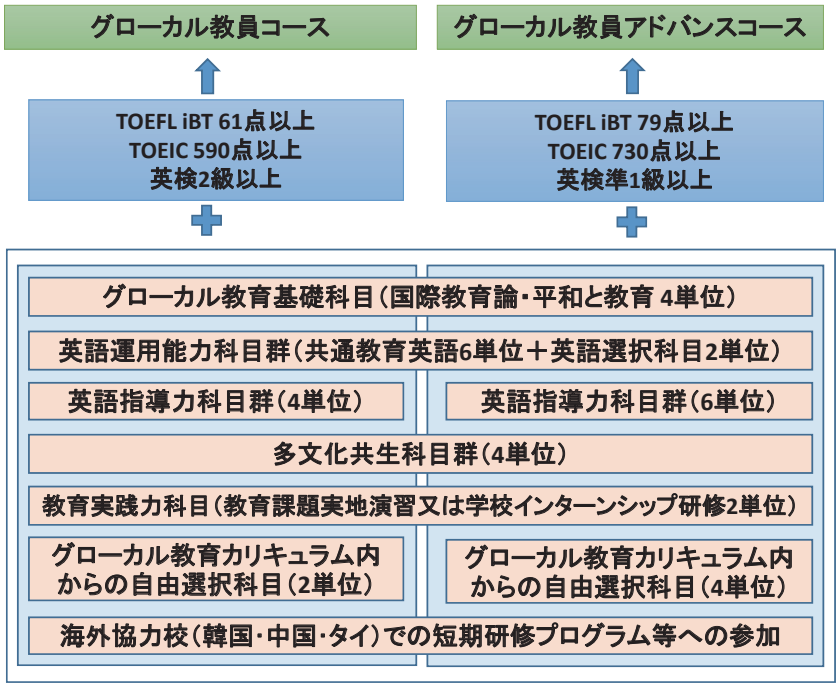
3. 幼稚園から高等学校までの系統的なグローバル人材育成カリキュラムの開発

次に、グローバル社会をよりよく生きていけるために必要とされる資質・能力を育成するための系統的なカリキュラムの開発についてお話していきます。

今回、私たちは、系統的カリキュラム　の大きな枠組みを、（出会う→広がる→つながる）×重ねるという形で提案しました。



カリキュラムの枠組みイメージ



〈出会う〉とは、異なる文化に出会う体験を通して、関心を持ったり、意欲を高めたりすることを表します。出会う多様な文化の中には、異なる国や民族性だけではなく、自文化や伝統文化を含み、さらに異年齢や障害の有無なども含まれます。

〈広がる〉とは、「出会い」を基に異なる文化に対する知識や理解を広げ、技能を深化させることを表します。自己の文化による一方的な見方にとらわれることなく、双方向的な見方（さらに多面的、重層的見方）を育成します。

〈つながる〉とは異なる文

化や人々とつながり、思考や判断を深め、表現したり行動したりすることを表します。共感的理解を基に、異なる文化や異なる人々と連帯感を持ってつながり、グローバルな社会や課題について批判的に思考し、適切に判断して、課題解決について表現し行動する力を育成していきます。メディアや英語を活用して、異なる文化の人々と仲間としてつながり、グローバルな課題に協働して取り組もうとする資質・能力を育てます。

〈重ねる〉とは、（出会う→広がる→つながる）のサイクルを繰り返し、学習を積み重ねることを表します。子どもの各発達段階において、〈出会う→広がる→つながる〉プロセスを、スパイラル的に重ねていくことにより、子ども自身がグローバル人材育成の目標に近づいていきます。子どもは、各教科・総合学習・特別活動などにおいて並行的、および相互交流的に学習を行い（重なり合い）、平和で民主的な社会の形成に貢献でき、世界の人々と違いを認め合い、課題に対して共に協働できる人への成長をめざします。

このような枠組みの中で、コミュニケーション能力、多文化共生能力、英語運用能力の育成に焦点を当てていきます。幼稚園から高校までの学校段階において、これらの3つの育成すべき資質・能力が相関し、スパイラルを形成しながらグローバル人材が育成されていくプロセスを想定しています。表は、（出会う→広がる→つながる）×重ねるが子どもの発達段階との関係の中でどのように位置づけられているのかを示しています。

発達段階	学校段階	出会う	広がる	つながる
発展期	高等学校	重ねる	重ねる	グローバルな課題を共有し、協働して解決に向かおうとする
充実期	中学校	重ねる	グローバルな課題について考える	グローバル社会の一員としてつながる
基礎後期	小学校高学年	グローバルな課題について関心を持つ	グローバル社会について考える	世界の文化や人々とつながりを深める
基礎前期	小学校中学年	グローバル社会に関心を持つ	世界との関係を知る	異なる文化や人々とつながる
	小学校低学年	世界の国々と出会う	異なる言葉や文化を知る	
前基礎	幼稚園	異なる言葉や文化に出会う		

発展期である高校での到達目標として、【出会う】ではグローバルに考える機会を与える文化や人に積極的に出会う。異文化体験者と交流する。異文化理解の困難性と克服方法について学ぶ（例：留学生、在日外国人、難民や戦争体験をした人々）ことなどを目標としました。【広がる】ではグローバルな内容について知識を広げ理解を深める。より広い世界を意識し、違うものの見方や考え方をする人がいるという多様性を常に意識することができる。日本の歴史や文化について深く理解する。グローバルな社会の課題（例：多文化共生、国内外での平和形成、世界における人権尊重、地域紛争や戦争、世界における経済格差や最貧国の現状、持続可能な発展）を理解することなどを目標としています。【つながる】では、グローバルな課題について、自分の問題意識に従ってまとめて発表し、意見交換する。平和の形成方法や多文化共生のあり方について思考し、発表する。学んだ内容を、ICTを活用して説明できる。日本の文化や歴史について英語でプレゼンテーションする。ディスカッション、ディベート、協同学習などを活用して、異文化理解や合意形成の方法を習得する。複合的な課題について条件や本質を見極める問題発見力や課題解決について考える力を備えている。人種、国籍、民族の違いを越えて平和のために協働できることなどを目標としました。【英語でつながる】では、世界の人々と交流し協力できるように英語運用能力を高める。社会的な話題や抽象度の高い内容について読んで内容をつかみ、普通の速さで話された英語を聴き取れる。グローバル社会について自分の意見を英語で述べられる。グローバルな課題について意見交換し、発信できることなどを到達目標としました。

特別支援学校については、内容を特定せず、「他者と出会う」「他者を知る」「他者とつながる」として包括的に取り扱います。平成28年度は、このようなカリキュラムの枠組みの中で、単元や授業を作っていきます。

枠組みの設定と併行して、平成27年度は本学附属学校園において、試行的にグローバル人材育成のための授業開発を先行して実施し、30を超える授業実践が行われました。特徴ある授業実践としては、小学校を中心に歴史と伝統のまち京都の祇園囃子や六斎芸能「四つ太鼓」を教材とした授業や、中学校の古典において「方丈記」を取りあげた授業、日本の米作りを取り上げた授業実践など、様々な観点から授業開発が進められました。平成28年度は、カリキュラム素案の具体化と共に、カリキュラム素案に照らし合わせながら、幼稚園から高校までの学校種間の繋がりを意識し、系統性を重視した授業や単元の開発を進めて行きたいと考えています。

本プロジェクトは、平成28年度から始まる第3期中期目標計画の中に位置づけられ、今後も大学と附属学校園が協力しながら取り組むことになっています。

京教生の皆さん、ぜひこのプログラムに参加して、グローカル教員を目指しましょう！

フィンランド、エストニアを訪問し住まい・まちづくり学習を考える

家政科准教授　延　原　理　恵

JSPS科研費26350072の助成を受け、2015年11月8日から11日にかけてフィンランドの子どものための建築教育とエストニアの歴史的建造物群を活かしたまちづくりの視察調査に行ってきました。科研費の研究課題名は「地域社会の「つながり」を育む住まい・まちづくり学習の実践モデル構築に関する研究」で、住まい・まちづくりの学習や活動によって地域資源を活用し地域社会のつながりが形成される実践モデルについて調べています。その一部をここで紹介させていただきます。

○フィンランド

フィンランドはOECDによるPISA（学習到達度調査）で上位にランクされていたことから、フィンランドの教育は世界から注目され、学校教育の視察に多くの方が訪れているようです。しかし、私が興味を持ったのは、学校以外での学びの様相が日本と異なり、子どものための建築学校（Arkki）があるということです。

Arkkiには4歳から18歳までの子どもたちを対象に年齢ごとにクラスが設定されていますが、生徒は7歳から13歳が多く、全体の4分の3を占めているそうです。放課後に学ぶ長期プログラムの他にも、夏休み等を利用したハット・ビルディング・キャンプをはじめとする短期プログラム、幼稚園や学校に出張してのワークショップ、学校教員対象の研修と幅広い活動をされています。

扱う規模も、住まいや建築だけではなく、パッケージデザインからまちづくりまでと幅広く、今回の訪問では校長のメスカネンさんから、子どもたちがまちづくりに参加したときの話をうかがいました。ヘルシンキ市都市計画局との協働により、建築家がファシリテーターとなった市民参加システムをつくり、子どもたちも再開発計画の提案を行ったのだそうです。

ヘルシンキ　子どもの建築学校（Arkki）

ハット・ビルディング・キャンプについては、本学で2015年夏に開催した公開講座「家づくりこどもスクール」と近い取組みであり、これによって子どもたちの問題解決力や創造性を豊かにし、協働する力を伸ばすことができるという点で共通していました。

ヘルシンキ再開発計画の紹介スライド

ハット・ビルディング・キャンプの紹介スライド

ヘルシンキでは、その他にアルヴァ・アアルトのアトリエ、建築博物館を訪れました。アアルトは、日本建築に興味を持っていたといわれ、自然と調和した建築を多く設計しています。建築博物館の企画展は、日本の「数寄屋」でした。海外で日本文化がどのように紹介されているのか興味深くみることができました。

アアルトのアトリエの庭

フィンランド建築博物館

○**エストニア**

エストニアはヘルシンキからフェリーで約2時間と近く、Skype（スカイプ）を産み出した国であり、IT教育が進んでいることでも知られています。今回は、エストニアの中でも世界遺産に指定されている旧市街のタリン歴史地区を訪れました。歴史地区であるのに、どこでもすぐにWi-Fiがつながり、IT先進国の一端を感じました。ここでの目的は、中世のまちなみが残るこのまちで、景観や観光という視点から地域資源である歴史的建造物群を活かしたまちづくりの様子を観ることです。

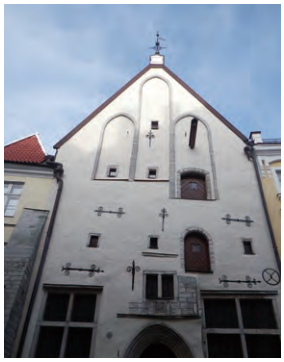
京都の景観まちづくりは日本の中でも先進的であることで知られています。今でこそ平成19年から実施された「新景観政策」によって姿を消していますが、数年前まではまちに似合わない「騒色」看板が目立っていました。また、まちなみを構成している京町家は減少の一途をたどり、京都のまちなみはかなり変化しています。

このことを頭においてタリンのまちを歩くと、まず看板がまちの雰囲気にあっていてデザインがおもしろいことに気づきます。そういえば、京都の美山かやぶきの里でも歴史的景観を大切にするために店の看板が景観にとけこむように配慮されていたことを思い出しました。

動物の足跡をたどると自然史博物館へ

タリン歴史地区の看板

まちの広場には中世のコスチュームでサービスをしている人がいたり、自然史博物館エントランスには動物の足跡がさりげなくついていたり、歴史的建造物を活かした景観や観光のあり方を考えさせてくれました。



タリン歴史地区の建物とひと

○**最後に**

帰国後まもなく、パリ同時多発テロが発生しました。フィンランドとエストニア間はEU加盟国同士ということで出入国の審査もなく行き来することができたのですが、この後、警戒を強めるとの報道もありました。訪問先では行く先々で親切にしていただきました。平和であることを強く希望し、また訪れる機会があることを願っています。

京都が一番

日本語・日本文化研修生　**オムカル　カイラス　チルマレ**
（インド出身）

私は初めて日本に来たのは2014年の5月のことで短期奨学金をもらって十日間日本に滞在した。そのとき訪れたのは東京と山形県。

2015年9月29日にやっと、一番憧れのあった京都に来る夢が実現した。28日の夜、インドの首都であるデリーから関西空港まで10時間ぐらいかかって、飛行機の中の時間ずっと眠れなかったのですごく頭が痛くてさんざんだった。関西空港に到着した瞬間、口から「よっし、これから1年間夢を生きるぞ」という言葉が出て、日本の色々な経験を精一杯味わうために心を準備して日本の土を再び踏み出した。

国際交流会館でのみんなと新年パーティの時の書き初め体験

行き先は京都教育大学。関西空港から留学生のための向島学生センターまで2時間ぐらいかかり、到着次第、色々案内、入居手続きの後、やっと、部屋に入った。

しかし、私が一番悩んでいたのは一人暮らし。生まれてから、一瞬も家族から離れたことのなかった私はこの一年間耐えられない、しばらく、家族のことが恋しくてインドに帰りたいと思っていた。翌日、自分で料理を作る苦労を体験し、向島の寮の周りをまわり、近商スーパー、マクドナルドを発見し、一日中部屋の中でのんびり過ごした。次の日、初めて大学に行って、オリエンテーションのときに大学の方々に色々説明してもらい、保険、住民登録などの手続きが終わった後、学生課の先生と同じ寮で住んでいるほかの留学生たちと一緒に大学の食堂での初めてのかき揚げうどん、最高だった。それがかき揚げうどんにはまるきっかけ。

京都に来てから一週間後、本格的に授業が始まり、京都の雰囲気に順応するようになった。京都教育大学は向島の寮から40分ぐらいのところにあって、行くまで1回乗り換え、墨染駅から徒歩で10分の遠距離だ。それに私は電車が苦手だから最初の一ヶ月は学生センターの友達と大学まで歩いていっていた。そのおかげで、寮の周りにある駅、色々な施設のことをしることができた。

日本での1番最初の友達！この人々抜きでは京都での生活は想像もできないほどに頼りになれる大切な存在だった！

秋の景色!!! 京都教育大学のキャンパス。綺麗やねん

京教のキャンパスは自然に恵まれていて、すごく広いから新人の私は最初の一週二週間は自分の選んだ授業の教室を見つけるまで授業の時間を過ぎていた。大学では様々なサークル活動、ボランティア活動ありその内、国際交流サークル(FIRA)とバレーボールサークル(MATCH)に参加していたので、交流をしてる間にたくさんの友達ができ、彼らたちから京都、日本の様々な面を知ることができた。特に国際交流サークル(FIRA)のみんなと南禅寺での座禅は貴重な体験だった。

10月に学生課の先生から島津アリーナでの大相撲場所のチケットをもらったので友達みんなと初めて相撲大会見ることができ、目の前に本物の相撲を見る素敵な経験でした。京都教育大学が11月に計画した研修旅行で奈良方面、吉野山、明日香村を訪問し、外国人にあまり知られていないが、伝統的なお寺や自然に恵まれたところで旅館に泊まり、典型的な日本文化を味わうことができた。6ヶ月お世話になった向島学生センターのおかげでクリスマスラジオに出演し、見学旅行で亀岡の丹山酒造に行って日本酒の造り方、種類が分かり、そこで皆と様々な種類のお酒を味わうことができ、それにラジオにインタービュウもされた。京都には観光スポットは山ほどあることは言うまでもない。大阪の食い倒れ、神戸の履き倒れといいますが加えて、京都の見倒れというべきだね。日本語を勉強してからずっと、京都は一番憧れのあった町だったのでここに到着した時の気持ちは言葉で説明できない。京都にきたら自分で発見し、冒険者の態度で視線を広げて奥深くまで京都の美しさに触れ合うことが第一。一瞬一瞬味わうことが大切だ。伝統にあふれた京都で一年間暮らすなんて素敵な夢に違いないし一度ここにきたら自国に戻りたくなくなるのは驚きはない。京都が一番だぜ。めっちゃ好き！！！！

インドに帰ったらこの景色味わえないかもしれない！向島学生センターで私の部屋の十階のところから撮った写真

戦後70年目からの平和と教育

教育学科教授　村　上　登司文

1. 戦後70年目

2015年は第2次世界大戦後70年と言うことで、新聞やテレビで多くの特集が組まれました。戦争体験継承について70年間の時間はどの様な意味があるのでしょうか。年齢で言うと、終戦時に10歳以上だった戦争体験者は80歳以上となり、また徴兵されて兵士として戦った終戦当時20歳だった男性は90歳となりました。今から生まれる子どもにとって、戦争体験者は曾祖父母（ひいおじいさんやひいおばあさん）の間柄となります。人間の寿命から言うと、ひいまごが、曾祖父母から話を聞く機会はかなり難しいと言えます。つまり、日本の戦争体験について直接体験者から聞く時代はもうすぐ終わろうとしています。『総員玉砕せよ！』の戦争漫画の傑作を描いた水木しげる氏は昨年93歳で死去されました。

今の子どもたちにとって、戦後生まれの祖父母が増え、この10年間ほどの間に、戦争体験の風化が進んでいます。過去の戦争体験が日本の人々の社会意識に及ぼす影響力は年月の経過とともに減っていると言えます。しかし、戦争は人が起こすものなので、戦争を防ぐためには、戦争の実相を次の世代がしっかり受け継いでいく必要があります。戦後70年が経過したとはいえ、やはり第2次大戦での敗戦とそれからの復興が、戦後の日本が発展する基礎となり、現在の日本の平和と繁栄につながっていることは今後も変わることはありません。

写真1　広島市の相生橋の復興（1949年岸本吉太氏撮影）

2. 戦争体験継承の日英独比較

日本において、戦後の平和教育は、第2次大戦における広島・長崎の被爆体験、沖縄の地上戦、戦時下の生活、地域の空襲体験、子どもの疎開体験、肉親との死別や離別などの戦争体験継承の教育実践が多く行われてきました。

日英独3か国の中学生を対象に2006年から2010年にかけて私が実施した比較調査において、日本では家族間の戦争体験の伝承が乏しいという実態が浮かびました。調査は日本の中学生1449人、イギリス534人、ドイツ476人を対象に実施しました。「第2次世界大戦のことを誰から聞いたか」（複数回答）の問では、日英独とも約8割が「先生」と回答しました。一方で、「祖父母」からは独69%、英47%であったのに対し、日本は38%でした。「父母」からも独67%、英42%でしたが、日本は19%のみでした。日本で、戦争について家族で考える機会をもっと持てるかもしれません。家族で地域にある戦争を扱う平和ミュージアムを訪問したり、戦争に関するテレビニュースを一緒に見て話し合ったりできるのではないでしょうか。

この比較調査において、「平和な社会を作るために学習する必要があるものは何か」（複数回答）の問で最も多かったのは、独が「ホロコースト（ユダヤ人大虐殺）」、2005年にロンドン同時爆破テロが起きた英は「テロ」、日本は「いじめ問題」でした。独では、社会全体でナチスの戦争加害の記憶や資料を残し、問い続けてきました。それが家庭内での話しあいにつながっているのではと思われます。

3. 平和とは

日本は第2次大戦において戦争の悲惨さを経験し、国民は平和の大切さを身をもって理解しました。戦後の日本は、平和国家になるように国民が努力しています。現在まで日本は安定した民主主義国として、世界の平和と発展に寄与しており、国内でも人権を守る努力が続けられてきました。そのかいあって、日本は文化的にも経済的にも豊かな国として、世界で認められるようになっています。

治安の良い日本国内に住んでいる私たちにとって、平和は普通のことで、空気のように目に見えにくい存在になっています。一方で、他の国々においては、海外ニュースで見るように地域紛争が絶えず、民族や宗教間での争いや戦争が起こる地域もあります。

地域紛争や戦争が無いだけで平和の条件が満たされたとは言えず、人々の人権が保障され安心して充実した生活が送れるより平和な社会を実現していく必要があります。日本国内だけでなく、世界の人々と手を携

えて平和な国際社会にしていくことがめざされます。

「平和」の言葉が意味する対象は、小さくは心の中の平安から、家族や友人間の親和的関係、学級内や学校内などの平穏で落ち着いた人間関係があります。平和の対象をさらに広げて、地域社会の安心である治安、県や国レベルの大きな地域での安定や繁栄、そして近隣国との友好関係、最も大きくは世界全体のレベルでの国際平和があります。

4. 平和教育の現状

日本では第2次世界大戦に対する反省意識から、戦争に反対する教育が始まりました。日本の場合、平和は戦争の対義語と解釈されてきました。国語や社会では今でも過去の戦争を題材にした内容が多くあります。兵庫県の小中学校など821校における調査では、平和教育が行われる教育領域は、道徳においてが最も多く、続いて総合的な学習の時間、教科、学校行事、学級活動の順となっています。（図1を参照）

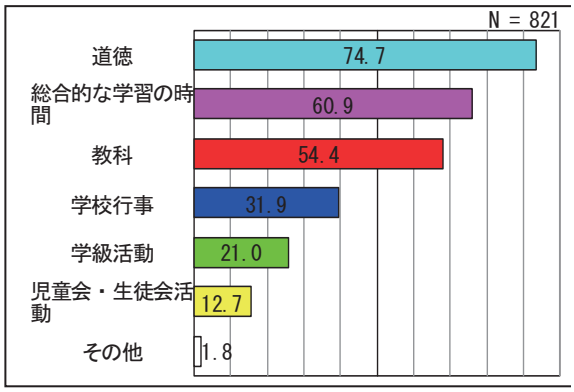


図1　平和教育が実践される領域（数字は%）
（兵庫県小中学校など　2015年調査）

平和教育の実践内容としては、広島・長崎の原爆被害が最も多くなっていますが、戦争や原爆の被害について知識を得るだけでは、平和な社会を形成することはできません。戦争の恐ろしさを知り、戦争被害者に同情することは、平和教育実践を進める土台となります。その上で平和教育の課題とされるのは、戦争についての知識と戦争被害者への共感が、平和に向けた社会参加の態度に結びついていくことです。

2006年に教育基本法が改正されましたが、その第1条（教育の目的）によれば、「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」と規定されています。平和で民主的な国家及び社会を形成する活動に、参加する態度や技能を子どもたちに育てることが大切といえます。これは平和教育の目的と重なるものです。日本国憲法の平和主義に立って国際協調をめざし、日本の子どもたちの心に「平和のとりで(defense)」を築くことが教育の重要な目的と言えるでしょう。平和の題材は、過去の戦争にとどまらず、人権や国際交流といった学びにも広がります。こうした学びも踏まえて、平和教育を進めていくことができればと思います。

学校の教員が平和の大切さを充分に認識していても、国内も学校内も急速に変化する状況の中でどのように平和教育を行うかは、なかなか難しい課題です。近年では、学力向上や情報化への対応など、次々に増える教育内容で教員が多忙化し、平和の問題にじっくりと向き合って教材研究をする時間を取りにくくなっています。「平和は大切である」と思っていても、教員は日々の教科や生徒指導、教務などの仕事、さらに課外活動の指導に追われて、平和教育の実践をすることが少なくなっていると言われます。

5. これからの平和教育

平和教育実践を進める方向性を二つあげます。

①平和な社会の形成者

これからの平和教育でも戦争について教えることは不可欠です。ただし、戦争が無いことだけで充分とするのではなく、より「積極的な平和」を作ることをめざします。平和な社会には、人権、平等、安全、公正、共生が実現される必要があります。あるべき平和像について子どもたちがイメージを構想し、平和な社会の形成に向けて希望を持って社会参加する資質や能力を育てます。

②子ども主体の平和教育

平和教育のあり方として、教育方法そのものが「平和的」であるべきといえます。教育方法が平和的であるとは、強制的、威圧的、抑圧的などの権威主義的な教育方法を教員がとらず、できるだけ子ども一人ひとりの個性や感性と人権を尊重した教育方法を用いることです。言い換えれば、平和問題を題材として授業で取り扱っていても、そこでの教育方法が頭ごなしの教化のようなものであれば、それは平和教育とはみなせません。子どもたちが平和問題に対して、多面的に見る視点、批判的に判断できる思考力を育て、異なる人々との相互理解や合意形成の力量を育てることも今後は重要となります。

平和教育では、子どもが受け身の教育形態ではなく、子どもの自発的・主体的な学習参加をうながします。子どもたちの興味と関心がある平和問題を題材として取り上げ、身近な暴力問題（いじめ・校内暴力）や、テレビで見る時事的な紛争との関係も考えたいです。日本の過去の戦争を学ぶときは、子どもが体験継承の受け身になるだけでなく、子ども自身が過去の戦争体験を追体験し、学んだことを周りの人々に伝える伝承者の役割を果たすことが今後は望まれます。

教室外の活動で学んだこと

理学科教授　芝　原　寛　泰

本学に赴任して35年がたち、その月日を振り返ることが多くなった今日この頃です。

本学に勤め始めた頃から、教育と研究に軸足をどのようにおくか、これは誰からともなく与えられた大きな課題でした。試行錯誤や思い込み、誤解を繰り返していく中で、教育と研究が肉薄するしか課題の解決はないと思うようになりました。教養教育の大綱化、定員削減、免許法改正、さらに法人化に続く時代の流れは、大学のあり方、学生の気質、そして教育や研究の進む方向に、予想以上の大きな変化をもたらしました。教員養成大学においては、自らの力で研究の方向性に自由度を持たせ、研究の方から柔軟に教育に迫るしか学生との接点はないように感じました。

毎日の授業だけでなく、教室外においても色々な活動の場面で、学生をとおして多くのことを学んだ思い出が残っています。

学生の協力を得ながら活動したことで「青少年のための科学の祭典」があります。当初は日本科学技術振興財団・科学技術館の主催だったのですが、現在は色々な団体の主催により全国各地の100を超える会場で毎年開催されています。京都では、藤森にある京都市青少年科学センターにおいて毎年、3000人以上の来場者を集め開催されていますが、研究室等のメンバーと共に出展してすでに18年が経ちました。主に小学生とその保護者を対象に、科学の面白さを伝えるため、身近な材料を用いた実験を、学生と共に工夫して出展することが研究室の恒例行事となりました。事前にアイデアを出し合い、安全性を最優先に材料や作り方の検討を繰り返して準備した実験を、当日は腰を低くして子供達を相手に繰り返し説明する学生の姿は、授業中や研究室ではなかなか見られない光景です。図1は「大気圧の不思議」（2001年）と題して実験を演示している様子ですが、見学に来た小学校の先生が、是非うちの児童にも見せて欲しいとの要望で、その後、小学校に出向いて実験教室を開きました。終了後に子ども達が感謝の気持ちで、校庭の落ち葉を集めて焼き芋を作ってくれたという報告を受けました。図2は、1998年に「つくって楽しむ分子・結晶の世界」と題して、折り紙工作を出展したブースでの風景です。まだ学習指導要領には登場していない粒子論の教材研究を学会でも発表して、孤軍奮闘している時期でした。このような活動を通して、学校現場でも「原子・分子の概念」が子ども達に受け入れられるという感触を得たのもこの頃でした。また当日には理科教員になった卒業生も、授業で使う実験のネタを探しに時々顔をだしてくれました。

図1　「科学の祭典」での学生の活動（2001年）

図2　折り紙による分子・結晶模型の作成（1998年）

2002年頃に「子どもゆめ基金」（当時、国立オリンピック記念青少年総合センター主催）の援助で数回、活動したことも思い出されます。例で紹介するのは学内の教員有志4人で協力して、またTAの学生も参加し、一つの大きなテーマの下でいくつかの実験を紹介したイベントです。図3と4は、「身の回りの不思議を科学の力でさぐる」のテーマで実験教室を実施している様子です。TAとして協力した学生のもつ意欲とベースの高さを感じたのもこのイベントがきっかけでした。

図3　講師の田中里志先生（上）と筆者（右）による実験教室

図4　講師の梶原裕二先生（上）と谷口和成先生（右）による実験教室

その後、同じような実験体験を子ども達に提供できる「ひらめき☆ときめきサイエンス」（JSPS主催）で活動することになりましたが、この時にも学生の協力は不可欠でした。科研費の研究成果を社会還元することが趣旨で、研究テーマのひとつである「マイクロスケール実験の普及」を図るため、実験テーマは限られていました。それでも中学生・高校生を対象にした実験の体験講座を7年間、実施することができ、資金的にも大きな助けとなりました。研究室に所属する学生だけでなく、マイクロスケール実験の経験をもたない学生も積極的にTAとして参加しました。未経験のTAのトレーニングも課題のひとつでしたので、無事に体験教室が終わると、マイクロスケール実験の普及に手ごたえをいつも感じていました。参加する中・高校生も簡単で小さな器具を用いて、簡略化された実験操作でも現れる目の前の様々な現象に率直な驚きを示してくれました。机上だけではない実感を伴う学習の大切さが、自分なりにわかったことも研究の推進力となりました。図5は、2014年に、お茶の水女子大学の大森美香先生（元、本学教育実践総合センター）がJSPSから派遣され、開会の挨拶に来られた時の様子です。

教室外での活動として思い出深いのが「ふれあい伏見フェスタ」です。1996年の当初は体育学科の野原弘嗣先生の提唱で「ふれあい伏見ウォーク」としてスタートしました。1998年頃に、社会科学科の香川貴志先生の案内で、当時の加茂直樹学長も参加されて、伏見界隈の遺跡や建物を近隣の方々と一緒に探索したことが記憶に残っています。JR新駅名に大学名を冠することができなかった理由に、近隣住民から近所付き合いのない大学と指摘されたことを加茂先生からうかがい、その後、「ふれあい伏見フェスタ」と名称を変えて、多くの近隣住民を巻き込むイベントに変身しました。一度も足を踏み入れたことのない「広域避難場所」にならないようにとの意見もあり、その時、武田一郎先生、高乗秀明先生をはじめ事務職員の方々や多くの学生が協力して、大学の近隣をビラ配りに走りまわりました。

図5　「ひらめき☆ときめきサイエンス」の開会式（2014年）

「ふれあい伏見フェスタ」では、研究室として一貫して「シャボン玉教室」を定番に継続的に参加してきました。はじめた頃には、大きくて割れにくいシャボン玉を目指して、資料や文献を探しまわり、それがきっかけで教材実験の面白さにもはまりました。その成果は学内で実施されていた「子どもふれあい教室」に参加する学生の指導助言にも役立ち、また附属学校からも器具の貸し出しの依頼もありました。図6は、2005年頃の「シャボン玉教室」の風景です。協力してくれた学生らが子ども達と自然に対話している姿を見て、安心感をおぼえました。当時の開催時期には学内の桜も満開で、それを見学する近所の人も多く、桜の下で飛ばすシャボン玉は格別でした。小学生の時に参加して、高校生、大学生になって再度、声をかけてくれた参加者もあり、20年近い歳月を実感しました。野原先生と一緒に植樹した桜の木も大きな幹と枝振りになるまで育ちましたが、このイベントはその役目を果たし2015年が最後となりました。

図6　「ふれあい伏見フェスタ」でのシャボン玉教室（2005年）

赴任した当時、他大学の理・工学部を意識することもありましたが、毎日の授業と並行して教室外で行った活動をとおして、教員養成大学の目指す方向性を一教員として感じとることができました。同時に、学生も教室外の活動から多くのことを学んだと思います。

竹と共に暮らしを築く

附属特別支援学校副校長　髙　岸　正　司

本校は、京都教育大学から丘陵を登って徒歩10分ほどの所にあります。昔は、軍の射撃場だったと言われています。すり鉢状になった地形で、この学校を初めて訪ねた人は、「どこに学校があるの？」と迷うそうです。

校門から入ると、まず桜並木が目につきます。春になり、ちょうど入学式の頃に、新入生を満開の桜が迎えます。

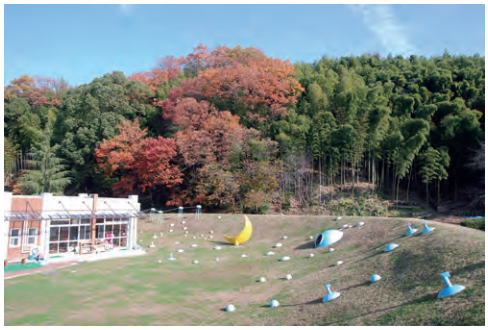
4月　校門から見える桜並木

そして、校舎の後ろにジブリのトトロの森のように孟宗竹の竹山がそびえ立ちます。所々から広葉樹の巨木が顔を出し、秋になると透き通るような青空と緑の竹山と広葉樹の紅で、本当に美しい風景となります。

校歌には、この竹が伸びゆく姿と子どもたちの成長が歌詞になっています。

「朝風吹いて　竹やぶゆれる　大亀谷の　空のもとみんな楽しく　きょうもまた　あすをめざして　学びます　光もとめて　竹の子のびる　大亀谷の　空高く・・」と校歌がつづきます。

この竹山（本校では、「竹の子山」と名づけています）は、本校の子どもたちを見守り、育んできました。そのことについて話しましょう。


小学部校舎と竹の子山

4月になると

4月に小学部、中学部、高等部と新入生が入学します。新入生の初めの学習は学校探検です。どんな教室があるのか、屋外にはどんな場があるのか等学校を巡りながら学習します。高等部になると本校に小学部から在籍する生徒が校内案内をします。竹の子山もその一つです。そして、筍が芽を出しているのを見つけます。「これ、筍。筍ご飯おいしいよ」と、教えてくれます。これが、竹と新入生の最初の出会いです。4月の終わりにはそれぞれの学部で手作りの若竹汁や筍ご飯を作って歓迎会を行います。

そのことは、本校の学校文化にもなっています。

筍掘りの様子

竹椀と竹皿を使った歓迎会

初夏の定番～そうめん流し～

筍のシーズンが終わり、掘られずに済んだ筍がどんどん伸びていきます。そして、春の竹の子山の整備も兼ねて、2年3年と経った竹を必要に応じて切り出します。

6月末には、竹を使った夏の定番のそうめん流しをします。そうめん流しは、保護者も交え、休日参観のご馳走でもあります。中学部の生徒が竹の子山から竹を切り出し運び出します。竹の傾きを見て鋸刃をいれ切る姿、一人で山から竹を運び降ろす姿は力強くたくましさを感じさせます。お椀も竹を切ってマイカップを作ります。お父さんお母さんと並んで流れてくるそうめんを食べる生徒たちの姿は、「おとうさんおかあさん見て！自分たちすごいだろう」と自慢げにも見えます。

竹の子山から
竹を運ぶ中学生

流しそうめんを
食べている様子

秋の終わりに

11月の後半になると、高等部は作業週間という学習を行います。高等部生徒は、毎日終日、屋外での作業に取り組みます。その主な題材が竹の子山の整備です。多い時で、一週間で100本以上を切り出したこともありました。教師は、竹の子山を傘を持って歩き、この傘が竹に当たらないくらい距離をとることを生徒たちに伝え、切り出す竹を決めます。「節の部分に白い粉をふいているのは若い竹」、「茶色のものはおじいちゃん竹」等を伝え若い竹は残すようにします。

切り出した竹は資材置き場に置き、小学部から高等部までが様々な形で使います。高等部の2組の生徒は、この資材を使って、竹炭小屋（この小屋は高等部3組の卒業制作です）で、竹炭作りに取り組みます。そして、作った竹炭は、バーベキューで使ったり、バザーで売る消臭剤になったりします。

窯詰めの様子

炭焼きの様子

門松作り

12月になると、門松作りがはじまります。この門松作りは当初教師で作ったのがきっかけでした。「これ、うちの子どもたちなら作れる。きっと！」と学習教材になりました。竹を使った学習なら、切る・割る・釘で打ち付けるはお手のものです。中学部ではミニ門松、校門に置く大きな門松を作ります。葉ボタンは学校で栽培したもの、笹や南天も学校にあるものを使います。子どもたちは、友だちと一緒に手をかけ時間をかけ、門松作りを通して、正月がくることの意味を学習していきます。

門松を作る

完成した門松

竹を通して学ぶこと

竹と言えば、私たちはすぐ竹取物語を思い浮かべます。竹取物語は、日本最古のすぐれた物語と言われています。そこからもわかるように、竹は昔々から日本人と深いつながりをもち、竹には神性があったとも伝えられています。それ故、竹取を生業としていた人たちは、貧しくとも一目置かれていた人たちだったのでしょう。

竹は柔らかさをもった材です。加工しやすく、農業や生活を営む上で、様々な生活を支える道具へと形を変え使われたようです。

本校が、竹を子どもたちの学習教材として使ってきたのには、そういった材の特性があったからかもしれません。

本校では、今まで述べたように、この竹、そして竹の子山という場が小学部から高等部に至るまで、大切な教材として位置づいてきました。子どもたちが、身体いっぱいで、様々な道具を使い、生活の必要を考え、様々な「もの」を作りだす学習は、暮らしをつくる営みにもなっています。

今、教育の中で、一つ忘れかけている視点があるとすれば、それは身体ということです。近年は、ICT等の情報機器にみられるように、視覚を学びの入り口にして学ぶことが、新しい生活、また学習の在り方のように言われることが多いように思われます。

しかし、学びの入口としての身体という点から様々な学びを捉えていくことも大切です。「竹を持って重さを感じる」「定規を使って長さをはかる」「人と力を合わせる感覚」「協力してできる喜び」等、身体を通して人とかかわる中で“身につく力”に、特別支援教育でよくいわれる「生きる力」の根っこがあるように感じてなりません。

どうぞ、機会があれば、是非、本校にお越し下さい。

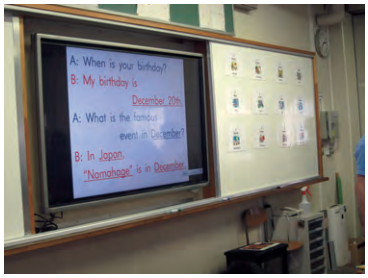
校門を入ると、四季折々のあり方で存在感を示す竹の子山が「ようこそ」と皆さんを迎えてくれることでしょう。

附属桃山小学校から全国へ

附属桃山小学校副校長　兒　玉　裕　司

附属桃山小学校は、校舎の環境整備が整い、学びの場での研究が数多く進められています。ほかでは類の無い研究指定を3つも受け、全国への発信にも進んで取り組んでいます。今年は研究の当たり年のように、たくさんの研究成果を発信しました。そこで、どのような研究を推進しているのか紹介します。

①　新教科「メディア・コミュニケーション科」の研究開発（文部科学省教育課程特例校指定）では、相手を意識して、主体的に情報を活用しようとする子の育成をめざして、誰でもが指導できるようにするためにメディア・コミュニケーション科の質を高め、普遍的に指導することができる教科書の作成に取りかかっています。たくさんの学校が視察にも来られています。



②「さまざまな人たちと言葉や文化の壁を越え英語を使ってすすんで関わりあえる人の育成」（文部科学省研究指定　英語教育強化地域拠点事業）では、4年間研究の2年目となり、附属桃山小学校・附属桃山中学校・附属高等学校で、小・中・高における英語教育を研究し、大学の先生方のご指導を受けながら、小学校英語教科化と高校までのカリキュラム作成などの研究を3校で進めています。小学校では、17年間続くオーストラリア・ベレア校と全学年が交流を通して、英語学習に意欲的に参加する子ども達の姿が多く見られます。平成28年度からは、更に台北大学附属小学校とも国際交流を開始します。益々の子ども達の活躍に期待しています。

③「子どもの創造性を育む伝統・文化教育～音楽科における伝統・文化教育～」（文部科学省研究指定　我が国の伝統・文化教育の充実に係わる調査研究）

附属桃山小学校では、音楽のカリキュラムに郷土の音楽や伝統音楽を位置づけ、系統だった学びを展開しています。そこに、これまで培ってきた京都の伝統音楽（祇園囃子・六斎芸能・お琴・三味線）の取り組みを生かして、子どもの創造性を育む伝統文化教育として新たに取り組んでいます。

④「グローバル人材育成プロジェクト」（大学と附属との連携研究）では、大学と附属学校園が一体となって、幼稚園から大学までの一貫した「グローバル人材育成プログラム開発研究」にも取り組んでいます。

⑤「3校園連携教育」では、幼小中の連携教育を始めてから21年目を迎えました。そして、幼小中が同じ研究主題で研究し、発表を行うようになって15年目を迎えます。今では毎月1回の定例の研究会で幼小中の教員が研究について協議し、幼児と小学生、小学生と中学生、幼児と中学生が同じ時間に同じ場所で共に学習したりすることが当たり前になっています。今後もより充実した幼小中連携教育を行っていきます。

以上のこれらの研究は、この1年でなく、今後も附属桃山小学校の使命として、研究の成果が子ども達の力となることを信じて更なる充実を目指して続きます。

また、研究以外でも子どもの安心・安全を考えた「命を守るランリュック」（多機能ランドセル）の商品開発協力・採用も行いました。このランリュックは、もしも、川等に落ちたときに70kgまで浮かせる浮力があり、何かにぶつかった時には衝撃を吸収でき、チャックを開けると防災頭巾も収納されています。平成28年度の新1年生より、全国に発信します。

さらに、5年生で臨海学習を行っている本校では、水着についてもセパレートのオレンジ色水着に変更します。オレンジ色は水の中で一番目立つ色として報告があります。ライフセーバーやブイがオレンジ色もそのためです。こちらも京都初の取り組みと言えます。

これからも、附属桃山小学校は更なる研究や取り組みを全国に発信していきたいと思います。

持続可能な社会の担い手を育むために
～グローバル社会で活きる自立と共生の力を育む学校をめざして～

附属桃山中学校副校長　佐々木　稔

「ひろがる環（わ）」は「つながり」の輪！

校門を入ってすぐ左の幼稚園側との垣根に立つ、このモニュメント「ひろがる環」は、今から17年前、21世紀の幕開けを前に、人と人のつながりの「環」、人と自然のつながりの「環」、そして、ますますその「環」をひろげる、可能性に満ちた生徒の姿を主題にして制作されました。本校創立50周年記念モニュメントとして、本校第20期生で彫刻家の九後 稔（くご みのる）先生によって制作された作品です。

今、21世紀に入り、あらゆる領域で多文化化、グローバル化が急速に進み、ある一定の「正解」を共有できた20世紀の「成長社会」から、価値観の多様化、複雑化が進む「成熟社会」へと大きく転換しています。そこでは、これまで予期しなかった課題が、複雑に絡み合いながら、待ったなしで私たちに次々と突きつけられ、それらの解決困難な課題に対して、新たな発想や視点で主体的に、創造的に、協同的に解決を図っていく力が求められています。今後このような社会を生きていく生徒たちだからこそ、人と人、人と自然との「つながり」をいっそう意識し、持続可能な社会の担い手となって自立し、共生していける資質や能力を育ませること、これこそが私たち大人、学校に課せられた使命だと考えています。

ここでは、それらに向けた本校での「つながり」を意識した取組の一部を紹介しましょう。

～「知」をつなげ、課題解決力を育むために～
（「探究」と「協同」を重視した総合的な学習「MET」）

本校では、「環境」「国際」「福祉・健康」「生き方」をテーマに、2・3年混合の希望選択による約15コースの講座が開設され、生徒たちはグループごとの探究的な学びの過程で、課題設定、体験・調査による情報収集、分析・考察、まとめ、発表と、課題解決力の基礎を主体的に協同的に学んでいます。

～帰国生徒が輝き、全校生徒がつながるために～
（2015年度 帰国生徒教育学級40周年を迎えました）

国立大学附属中学校では3校のみとなった帰国生徒学級を特設し、個々の課題に応じた指導支援を充実させるとともに、彼らのグローバル資質を最大限に活かし、自己肯定感を育みながら、彼らを核とした全校的な国際教育を推進しています。

帰国生徒スピーチ発表会

中国少年訪日団との交流

～世界とつながるために～
文科省・外務省後援事業「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」への参加

本校1年生が、台湾とインドネシアのユネスコスクール加盟の3校と、お互いの国の「伝統文化」をテーマにインターネットを活用した交流学習に取組みました。スカイプを利用して、教室に映し出されるお互いの表情や音声を交換しながら、お互いの「文化」や壁画のモチーフを交流しました。一瞬のうちに教室は、言葉の壁を乗り越え、約四千キロも離れた赤道直下の国の仲間と心通わす、高揚した空間に包まれました。また共有の「電子掲示板（フォーラム）」を活用し、帰国生徒と一般生徒が協力して、コミュニケーションツールとしての英語を駆使しながら相手校と交流することで、学年全体の英語力向上にも大きくつながる学習活動となりました。

創立130周年を迎えて

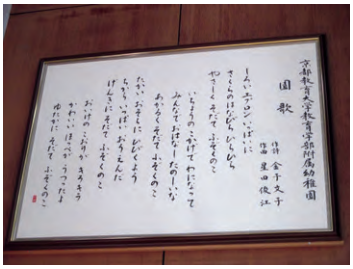
附属幼稚園副園長　斎　藤　真由美

“附属幼稚園創立130周年を祝う会”を平成27年12月16日に挙行しました。遊戯室に在園児と保護者が着席し、来賓の方を拍手でお迎えして、開式しました。来賓は、京都教育大学学長、附属学校部長・副学長、歴代の園長、副園長、そして園歌の作詞者、作曲者、同窓会代表者の方々です。

祝辞は学長の位藤紀美子様、元園長代表糸井道浩様、元副園長代表藤原愛子様からいただきました。77歳の糸井先生は、親鸞聖人の「ありがたくして今会うこと得たり」の言葉より、130周年の時に巡り会えたことは、おめでたいこと、ありがたいことだとおっしゃいました。92歳になられた藤原先生は「うれしくても涙がでるの」と、涙をぬぐいながら子どもたちに語りかけるように話してくださいました。「附属幼稚園は私のふるさとだと思っています」「イチョウの木のように元気に育ってください」というお話を子どもたちは、しっかりと聞いていました。

園歌は、作曲者星田俊江様のピアノ演奏、作詞者金子文子様の歌と共に出席者全員で歌いました。お二人は、創立100周年を迎えた時の保護者でいらっしゃいます。

記念品は、園章の刺繍入りの演台カバー・新たに書いていただいた園歌と額をいただきました。園歌を書いてくださったのは本学教授であり、書道家でいらっしゃる岡田直樹先生です。



昔の幼稚園のスライド上映では、今と違う場所にあった幼稚園の様子や着物姿、大きな車の遊具があったことなどを子どもたちは興味深く見ていました。

最後に、創立130周年のこの年に在園する**子どもたちと保護者からのお祝いのメッセージ**が伝えられました。この日を迎えるにあたって、イチョウの葉型のカードに親子でメッセージを描き、全員のカードを貼って大きなイチョウの木を作ったり、和紙の花で「130さいおめでとう」の文字を作ったりして、大型のカードを完成させていました。幼稚園の誕生会で自分たちが先生からもらっているのと同じように、130さいを祝うカードを“幼稚園”に贈りたいと思ったのです。壇上でカードが披露されると同時に、「ふぞくようちえん、130さいおめでとう！」の子どもたちの声が遊戯室に響きました。すると、思わず参加者全員が拍手をし、遊戯室はお祝いの気持ちでいっぱいになりました！

この後、子どもたちはこの日の**お祝の品**として、イチョウの葉のマークがプリントされた130周年記念の布製トートバックをいただきました。

さて、このようにして開催されたお祝いの会は、節目として行うべき行事を行ったということで終わってはいなかったと思います。昔からの歴史や伝統を知ることで、幾度もの引越しや工事を重ねて今の幼稚園があること、附属幼稚園を愛し、その伝統を守り見守ってくださっているたくさんの方の思いがあってこそ今の幼稚園があること、いつの時代も変わらず幼稚園生活を楽しむ子どもたちの姿があったことなどに気づき、感謝の気持ちを抱いたことでしょう。附属幼稚園を愛する気持ちが生まれたことでしょう。そして、参加者の年齢や立場は違っても、附属幼稚園や自分の存在に対するこのような気持ちを共有できた喜びが、これからも附属幼稚園が発展していくための力となっていくように思います。そして、子どもたちが大きくなるにつれ、附属幼稚園の存在は自分の心の中にあることに気づき、生きていく上での力となってくれることを願っています。

植物の栽培を通して

環境教育実践センター教授　南　山　泰　宏

環境教育実践センターの専任教員として昨年4月に着任し、農業実習など高等学校・農業の免許科目を担当しています南山です。主な研究分野は植物遺伝育種といって、植物の品種改良に関する研究を行ってきました。大学院を修了してからは、京都府の農業研究機関で、京都府の農業振興のための研究開発に携わり、これまでに舞鶴特産の大型甘唐辛子「万願寺甘とう」、丹波特産黒大豆のエダマメ「紫ずきん」、京の里芋「えびいも」などの品種改良を行いました。どれかひとつでも食べたことがあると言ってもらえると大変うれしく思います。

品種改良した「万願寺甘とう」

「万願寺甘とう」や「えびいも」などは、一般に在来品種と呼ばれ、古くから地域特有の野菜として栽培されてきましたが、生産性が低いことや西洋型の食生活への変化に伴って、姿を消していく在来品種もたくさんありました。しかし、近年、食生活が豊かになり、多様な食材が求められる中で、かつて地域の食文化を支えていた在来品種が見直され、「万願寺甘とう」のように辛味を無くす品種育成や、サラダなどの生食用に小株で収穫する「ミズナ」の栽培方法の開発など、現在の食生活に合わせた改良も行われています。小学校などでも地域社会との繋がりを大切にと、その地域の在来品種を栽培し、食する教育活動が行われている例もあり、これまでの経験を活かして、センターでの農業実習でも京野菜を中心とした在来品種も栽培体験できるようにしたいと考えています。

左：従来の大株ミズナ
右：現在流通している小株ミズナ

一方で、農業は人が生きていくためには欠くことのできない産業であり、自然環境と密接に関わりながら生産活動が行われています。それゆえに、農業教育は、食の循環を通して、自然の仕組み、人間と環境との関わり、人間活動が環境に及ぼす影響について、幅広い理解につながる環境学習の場も提供していると言えます。でも、残念ながら最近は生産と消費がかい離してしまって、食料がどのように生産されているのか、十分に理解されていないように思います。農業体験の重要性が再認識されている昨今、様々な校種の教員を目指す学生の皆さんにも、植物を栽培する活動を通して、農業の意義やその教育力についても理解し、植物を栽培するための知識や技術を習得して欲しいと願っています。

小学生を対象とした公開講座の様子

最後になりましたが、5月に行った新入生の基礎セミナーで、センターの紹介と簡単な栽培体験学習をしました。その際に行った受講生のアンケートの中に、久しぶりに土や植物に触れることができて懐かしい気持ちになりました、という感想がたくさんありました。京都市内も私が幼少期を過ごした頃に比べて都市化が進み、田んぼや畑が本当に少なくなりました。でも、京都教育大学にはこんなに近くに田畑があって、身近な自然を感じることができる場所があることを忘れずに、実習等の様々な授業や研究活動、公開講演会などで是非センターを利用して下さい。これからも、多くの学生や地域の方に農業体験や環境について考える場として活用してもらえるように、私も頑張りますので今後ともよろしくお願いいたします。

農業実習の授業での田植えの様子

「学びの原点」を追究する

教育支援センター教授　岡　田　敏　之

私は、京都市立中学校の数学教員として採用され、22年間学校現場の教員として勤めた後、京都市教育委員会生徒指導課や京都府警察本部少年課を経て管理職として再び中学校現場に戻り、そして今年度から本学にお世話になることになりました。普通に学校教員をしていては、経験できないことをたくさんさせてもらっています。今回は、その中から京都府警察本部と前任校の洛友中学校で経験してきたことを紹介したいと思います。

京都府警察本部少年課には、2010年度に少年サポートセンター所長補佐として派遣され2年間勤務しました。当時（2009年）、京都府においては、刑法犯で検挙された少年の数が、全国ワースト1（1000人の少年に対して18.8人）、再犯率はワースト7（同35.7人）と深刻な状況にあり、京都府・市教育委員会と京都府警察とが人事交流（府市相互各1名）を行うことになりました。ミッションは、警察と府・市教育委員会の連携強化はもちろん、問題行動の未然防止及び発生時の円滑な対応と子どもの規範意識の育成です。初めての人事交流であったため、すべて手探り状態のスタートでしたが、少年非行を減少させるために、小中学校への非行防止教室の普及と立ち直り支援活動を中心に力を注いでいきました。

非行防止教室は、その指導案や教材づくりから始め、スクールサポーター（警察官OB）や少年課の署員への指導・支援です。府・市教育委員会の協力により、現在では府・市内のほぼ全ての小中学校で行われるようになりました。また、立ち直り支援は、少年サポートセンターのスクールサポーターや各警察署員が、保護者や学校からの依頼で、非行や問題行動を繰り返す子どもに寄り添いながら指導を重ねていく活動です。私は、教職の経験を活かしサポートセンターに来所した子どもたちの学習支援、学生ボランティアBBS（ビッグ・ブラザーズ＆シスターズ）のサポート、対象の子どもたちに座禅を体験させたり自然体験合宿に引率したりなどの支援活動をしてきました。これらの活動を通して、不安定で紆余曲折を繰り返しながらも、子どもたちの立ち直ろうとするエネルギーを感じることができました。また、非行を繰り返す背景を理解し、しっかりとその存在と思いを受け止めることの大切さも再確認できました。

2年間の警察経験を経て、洛友中学校の校長として学校現場に戻りました。洛友中学校は、不登校を経験した子どもたちが転校して通う学校です。警察で関わってきた非行少年と洛友中学校の不登校生徒、真逆な子どもたちのようではありますが、私は決してそう思いませんでした。ある意味で、根本は同じなのです。

洛友中学校には夜間学級（夜間部）があり、そこには様々な理由により学齢期に義務教育を果たすことができなかった人たちが一所懸命に学んでおられます。平均年齢は65才。私たちには想像もできないような辛い経験をされてこられた方も少なくありません。だからこそ、学校で学べる喜び、わかる楽しさを知っておられます。洛友中学校は、そのような夜間部の生徒と、不登校を経験したがそれを克服しようとする昼間部の生徒とが、世代や国籍を超えてふれあい学び合う全国唯一の学校です。私は、夜間部の生徒から「学びの原点」を知りました。

そもそも人が学ぶということは、例えば、今までできなかったことができるようになった。知らなかったことを初めて知ることができた。疑問に思っていたことがやっと解決できた。このような時、人はこの上ない尊い喜びを感じます。だからもっと知りたい、もっと勉強したいという気持ちになります。これが「学びの原点」です。

ところが、今の子どもたちは、「学び」というものを手段化してしまっている傾向にないでしょうか。「いい成績を取るため」「いい高校や大学に入るため」「一流企業に就職するため」…。確かに、自分の夢を実現するためにはそれは必要であり、そのことは素晴らしいことで、決して否定するつもりはありません。しかし、それが過熱すると点数主義に走り、過度な競争原理が働き、本来の「学び」を見失ってしまいます。さらに、それは「いじめ」にも発展する可能性もあり、少年非行や不登校にもつながっていきます。今一度、「人は何のために学ぶのか」「学ぶとはどういうことなのか」という原点に立ち戻ることが必要です。

「学び」というものは、わかったときの喜びから自分で調べようとする探究心へ、そして達成感、さらに自信へ…というプロセスが大切です。それがさらなる「学びのエネルギー」にもなっていきます。その結果、自身の夢の実現へとつながっていくものです。私は、この大学に寄せていただいたのは、これから教職をめざす学生さんたちに、このような「学びの原点」、「夢の追求」、そして「子どもたちの心に火をつける指導」などを発信していくことが新たなミッションだと思っています。これから共に学び、共に深めていきましょう。どうかよろしくお願いいたします。

心の声に気付く

草津市立笠縫小学校　教諭　村　上　ちひろ
（社会科教育専攻　平成20年度卒業生、社会科教育専修　平成22年度修了生）

小学校教員として働き始めて、5年が経とうとしています。ようやく仕事にも慣れてきましたが、失敗したり壁にぶち当たったりすることもしばしば。そんな時、私が必ず思い出す子どもたちがいます。それは、初めて担任した5年生の子どもたちです。

右も左もわからない状態で、いきなりの高学年担任。「私に5年生の子どもたちを扱うなんてムリ！」と消極的な気持ちしか出てきませんでした。そんな私の不安が子どもたちにも伝わったのでしょう。学級経営はうまく行かず、子どもたちはどんどん私の言うことを聞かなくなりました。そうじはしないし、授業中も常にうるさい。注意したら屁理屈な口答えをするし、嫌なことがあると学校を飛び出して家に帰ろうとする。「どうしてこんなことするのだろう。」と子どもたちの言動を全く理解できませんでした。子どもたちのことも好きにはなれず、早くこの1年が終わってほしいと思い続けてやっと迎えた、修了式。学級の子どもたちは、みんなで書いた寄せ書きをプレゼントしてくれたのです。そこには「先生なんて大っ嫌い！」と毎日のように教室で叫んでいた子のメッセージもありました。メッセージの一つひとつを読んでいると、自分が子どもたちと向き合うことから逃げてしまっていたということに気付きました。理解できなかった数々の言動も、もしかすると私の気を引きたかったのかもしれません。子どもたちからしてみれば「どうして先生は私の気持ちをわかってくれないの？」と思っていたことでしょう。思春期が始まる5年生という発達段階から考えると、素直に自分の気持ちを表現できなかったのだと、後になって分かりました。

子どもたちは日々、予想もしないようなことをしたり、言ったりします。しかし、その言動の一つひとつに込められている「心の声」を聴けば、その子の本当の気持ちが見えてくる。本当の気持ちが少しでもわかれば、その子に寄り添うことができる。教師として当たり前のことですが、このことは私が過ごした5年間の中での一番大きな学びとなりました。

来年はどんな子どもたちに出会うのでしょうか。もちろん不安もありますが、これまで出会ってきた子どもたちから教わった「心の声に気付くこと」を忘れずに、子どもたちにとって実りある1年間にしていきたいです。

子どもの成長を、見逃さない教師でありたい

京都市立下京渉成小学校　教諭　山　口　　祐
（教育学専攻　平成16年度卒業生）

大学を卒業してから早くも11年もの歳月が経過しました。今、改めて自分自身を振り返った時、4年間の大学生活は、かけがえのないものであったと思います。特に、インターンシップ研修やボランティア活動など、大学生の時に小学校の現場へ行き、子ども達や様々な先生と出会ったこと、経験したことが、今の自分にとって大きな糧となっています。

現在、私は2年生の担任をしています。初めての低学年ということもあり、4月当初は戸惑うこともありました。しかし、日々の授業や様々な行事などを一緒に行うことを通して、楽しく子ども達と過ごせるようになってきました。一日の中で最も楽しい時間は昼休みです。なぜなら毎日、子ども達と一緒に遊んでいるからです。子どもは遊ぶことが大好きです。私自身も遊ぶことが大好きなので、非常に盛り上がります。遊びの中では、授業中には見られない子ども達の表情、言動が見えてくることもあります。だからこそ私は、子ども達と一緒に遊ぶ時間を大切にしています。

今年度担任しているクラスの中に、学習をしたり、ルールを守ったり、集団行動を行ったりすることなどを非常に苦手としていた児童がいます。私は特にその児童に注目しました。1年生の時はどのような様子だったのか、去年の担任や関わった先生方から話を聞いたり、日々の様子について、気付いたことを毎日メモしたりしました。できる限り肯定的な声かけをしたり、その子の興味・関心を駆り立てる授業を展開したり、放課後に一緒に学習をしたりしてきました。すると、1年生から2年生になり、その児童は大きく成長していっていることが分かってきました。

私は上記に挙げた児童との出会いを通して、教師は、子ども一人ひとりの「成長」を、しっかり見取ることが大切であると痛感しました。細かい成長に気付き、それを本人や保護者に伝えることで、子どもの自己肯定感が高まり、あらゆることへの意欲向上や、子ども、保護者との信頼関係の構築につながると実感しています。

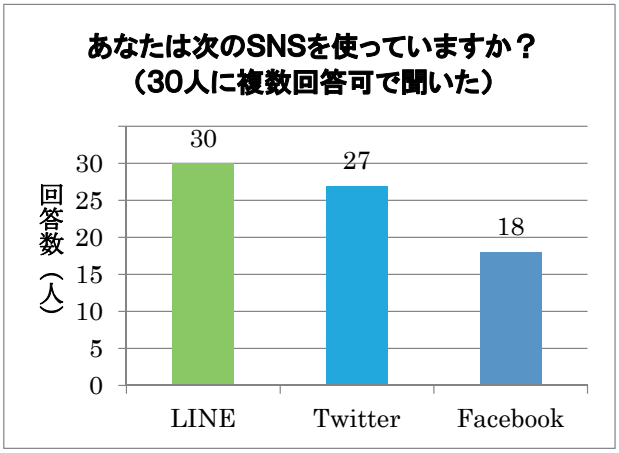
私は今後も、子ども達と一緒に授業をしたり、遊んだりする中で、一人ひとりのどんなに小さな「成長」にも気付くことができる教師でありたいと思っています。

学生広報委員会

あなたはど使ってい～SNS開

～本学のSNS事情は？？～

皆さんはどのような SNS（ソーシャルネットワークサービス）を利用しているだろうか。また、どのように使い分けているのだろうか。近年 SNS が広まっているということもあり、私達学生広報委員会は今回このことについて調査してみた。 まず、本学学生の SNS の利用状況を調査した。その結果は以下の通りである。



また、それぞれどのように使い分けているのかも聞いてみた。するとほとんどの学生から同じような答えが得られた。まず一つは Twitter、Facebook と LINE では使い方が大きく異なるということである。まず、LINE は主に連絡用であり、それ以外の使い方をしている人はほとんどいなかった。次に Twitter と Facebook の使い方は似ているが、Twitter の方が気軽にでき、Facebook は Twitter に比べて少し仰々しいということである。具体的に述べると Twitter はその名の通り「呟く」程度であるが、Facebook はブログに近い感覚で、近況を報告したりするのに使っているということが分かった。本学学生の利用状況や使い分けはこのようなものであった。

SNS といえば気軽に情報発信できる一方、トラブルも問題視される。そこで私達は SNS のマイナス面についても同時に調査してみた。まずよく言われるような、いじめなどの問題が挙げられた。これは主に LINE で起こるようである。LINE では他の SNS に比べて、グループでのやり取りがよくされるため、「無視する」「仲間外れにする」といった形でいじめが起こってしまうのではないかと考えられる。また、Twitter に勝手に写真を上げられるというのも嫌なこととして多かった。これは下手をすると法律上の問題にもなりかねない。たとえ友人・知人であれ、他人の写真を誰でも閲覧出来るような状態にしておくのは危険であり、避けるべきであろう。やはり、SNS は便利である一方でトラブルを起こす可能性を孕んでいる。このことを常に頭に入れながら SNS を利用していくことが望ましいであろう。

～SNSはどうあるべきか～

私たち学生広報委員会ではこのたび、SNS を開設した。そこでは大学の活動や行事の様子や普段の構内の様子などの情報発信を行っている。今回の SNS の立ち上げについて、また、時代に合った情報発信について、本学学長補佐（広報担当）である国文学科の浜田麻里教授にお話を伺った。

＊　　＊　　＊

学生広報委員（以下、学）：今回、学生広報委員会が SNS を開設しましたが、ご意見を聞かせてください。

浜田教授（以下、浜）：学生広報委員会はこれまで年数回の広報誌を発信手段としてきましたが、それではペースが遅く、大学の『今』を発信するメディアとしては物足りなさを感じていました。今回開設した SNS を通して、幅広い人に大学のあらゆる面を情報発信できるようになったことはとても良いことだと思います。

学：SNS で情報発信する際の注意点は何でしょうか。

浜：情報倫理の観点から特定の立場に偏らずに広い意味での公平な情報発信を行うことが大切ですね。

学：現代の情報発信と以前との違いはどこにあるでしょう？

浜：30 年ほど前、パソコン通信というのが流行り出した頃は、知らない人と情報のやりとりをすることは革命的な出来事でした。それがインターネット時代の今は、不特定多数の情報があふれかえっており、本当に必要な情報の選別が難しいため、伝えたい情報を正しく相手に伝えるには相当の工夫が必要になると思います。

学：現代の情報発信の課題は何でしょう？

のＳＮＳを
ますか？
設　特集～

浜：　正しい情報を届けることが難しくなったと思います。ちょっとした情報が誤って理解されて、それが広がり、大きな影響を与えてしまうところですかね。
学：今後こうした課題を解決するためにどのようなことに注意するべきだと思いますか？
浜：情報の拡散をコントロールすることは難しいので、発信する側は慎重かつ丁寧にメッセージが伝わるようにすることと、発信する側だけでなく受け取る側も、情報を批判的な視点で読み、批判的な視点を情報発信の際にも生かすことが大切だと思います。
学：ズバリ、時代に合った情報発信とは何でしょうか？
浜：情報発信の手段は絶えず変化していくと思います。その変化に私たちが上手に適応することでその時代に合った情報発信もできるのではないでしょうか。

＊　　＊　　＊

本学の学生の多くが目指す教師になれば、SNS での情報発信の方法を子どもに教育する機会が当然あるだろう。だからこそ今、SNS のあり方についてもう一度深く考えてみてほしいと思う。

↑浜田麻里教授（左）と学生広報委員（右）

今回私たち学生広報委員会が開設したアカウントは
Twitter　@kyokyostprc
Facebook　京教学生広報委員会　です。
是非フォローしてください！また、発信したい情報があれば学生広報委員かstprc@kyokyo-u.ac.jpにご連絡ください！お待ちしています！

～隣りの学生さん～
第３回
神出鬼没のジャグラー現る

↑ディアボロを持つ波々伯部燎さん

みなさんは IPC（情報処理センター）前の広いスペースで華麗にジャグリングをする学生を見たことがあるだろうか。彼は気まぐれで現れる。昼休みかもしれないし、急遽できた空きコマの時間かもしれない。「隣の学生さん」3 回目にして初めて個人の学生をピックアップすることになった。

そんな彼の名前は波々伯部燎（ほほかべりょう）君、発達障害教育専攻の 1 回生である。彼は、京教のサークル等ではなく外部のサークル「パフォーマンスサークル SHIKIBU」に所属していて、その個人練習をしている。その外部のサークルも彼が立ち上げ、自身が代表を務めている。当面の目標はサークルのメンバーを増やすことだと言っていたので、興味のある方はいい話が聞けるかもしれない。

彼になぜ IPC 前でやるのかと尋ねたところ、「地面が良くて、広いスペース。それにある程度人に見てもらえるから。」と答えてくれた。彼はジャグリングに興味を持ってもらいたい故に、そこを選んでいるのだ。写真では伝え切れない技の数々を見せてくれた。運よく彼を見つけることができたなら、その目で確かめてほしい。

番匠宇司先生のこと

京都教育大学附属桃山中学校元副校長　京都聖母女学院短期大学教授　**多羅間　拓　也**

私が京都教育大学特修美術科に入学したのは昭和43年で、専攻科を修了したのが昭和48年です。また、株式会社淺沼組本社設計部勤務を経て京都教育大学の附属桃山中学校に着任したのは昭和54年で、退職したのが平成20年です。したがって、私は実に三十数年も京都教育大学に籍を置いていたことになります。

さて、現在は存在しませんが、私が入学した特修美術科は「特美」と呼ばれており、入試は、日本画、西洋画、工芸、構成、彫塑の専攻別に行われました。特美の中でも工芸科は、学習内容が多岐にわたり、建築・工業デザインから木工、金工、陶芸、染織などのクラフトまで幅広く学べるところが魅力でした。そのため、建築に関心があった私は、受験に際して迷うことなく工芸科を選択しました。その工芸科で、私は生涯で最も大きな影響を受けた恩師、番匠宇司（ばんしょうたかし）先生に出会うことができたのでした。

当時の特美の工芸科は、工業デザイナーをめざす学生が多かったこともあり、二科会彫刻部会員である番匠先生の基礎造形重視の授業に疑問を感じる学生もおりました。しかし、卒業後は皆が異口同音に、番匠先生から「造形の基礎」をしっかり学べたことの意義を再確認していました。造形に関わらず、すべてのことにたいして「基礎が大事」と思い知ったものです。

当時の京都教育大学には、旧兵舎の木造校舎がまだ残っており、番匠先生の研究室も木造平屋建ての工芸棟の端にありました。先生は主にその研究室で作品制作をされていたため、我々学生はその様子を毎日目にすることができました。また先生は、しばしば私たちを研究室に招き入れて、お茶を入れてくださいました。制作されている作品の前でいろいろなお話をうかがう中で、先生の発想の原点や、制作への姿勢などを学ぶことができ、大いに刺激を受けたものでした。そして、そのころ教えていただいたことは、今でも私の造形上の指標となっています。

このように、番匠先生は学生に気さくに接してくださり、多くの学生から慕われる存在でした。また、先生は学生の様子よく観察しておられ、全ての学生の資質を的確に見抜いておられたことが印象に残っています。その意味で、先生は優れた彫刻家であるとともに、優れた教育者でありました。このことは、番匠先生を知る全ての人が先生を称賛される所以です。

シャープな線と、徹底的に平滑にされた面で構成される先生の妥協のない造形は、まさに求道者のように厳しく「かたち」を追い求められた成果でありながら、どこか温かく、時としてユーモラスであったりします。常に自己に厳しく、周囲には大変な気配りをされる、そのような先生そのものが形になっています。そのような先生の作品に魅かれた人は多く、もちろん私もその一人です。

建築の仕事に従事しながらも、まだまだ自分の将来設計に迷いを持っていた私は、番匠先生を慕って二科展に彫刻を出品するようになりました。そして、その何年か後、先生は私の迷いを察知され、教職への転身を勧めてくださいました。運よく、縁があって京都教育大学附属桃山中学校に着任することとなりましたが、その玄関横に番匠先生の作品「砂漠の王者」が設置されていて、いつも番匠先生から見守られているようなそんな気がしたものでした。

番匠先生は、京都師範学校時代から四十年近く京都教育大学に在籍され、昭和61年に鳴門教育大学に転出されました。その間、附属桃山小学校と附属高校の2校で校長を兼務されています。そして、鳴門教育大学定年退官後の平成7年、阪神・淡路大震災の年、突然のご病気で鬼籍に入られました。まだ69歳でした。私は、もうじきその年齢に達します。今でも二科展に出品を続けておりますが、とても先生に褒めていただけるような作品は作れておりません。平成11年に発刊された「番匠宇司作品集」を見ながら、改めて気を引き締める日々です。

「砂漠の王者」番匠宇司先生作（附属桃山中学校）

京都教育大学広報 第137号

発行日
2016年３月25日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
http://www.kyokyo-u.ac.jp/